オランダとインドネシアにおける歴史認識をめぐる軋轢と対話
—2002年，オランダ東インド会社400周年記念行事とその反響—

太田　淳[†]

Conflicts and dialogues concerning the recognition of the history of the Netherlands and Indonesia: the 400th anniversary of the Dutch East India Company and its repercussions in 2002

Atsushi Ota

In 2002, with it being the 400th anniversary of the establishment of the Dutch East India Company (VOC), a number of commemorating events were organized to celebrate the anniversary throughout the Netherlands. However, the anniversary provoked protest movements from the Indonesian both in the Netherlands and Indonesia. On the other hand, the protest movements brought about repercussions, which created an understanding of the movements by the Indonesian and attempted to promote a dialogue between the Dutch and the Indonesian. Especially in the Netherlands, historians played an important role to promote a dialogue between the two peoples with different views on the history of the VOC.

The series of events showed that it is impossible any more to celebrate a historical event only from one side. People on another side may think of the same event as insult, tragedy, or suffering. When we commemorate a historical event, we have to try to view the characters of various sides of the event; otherwise one-side view may hurt the feeling of the people, who were involved in the same event from a different position. It is important for historians to make discussions to view a historical event from as many sides as possible, in order to make it possible for people having different historical experiences to promote mutual historical understanding.

はじめに

2002年はオランダ東インド会社(VOC)の設立400周年にあたり，オランダ全国で様々な記念行事が繰り広げられた。木造帆船の再建と航海といった各種イベントが各地で取り行われた他，多くの博物館がVOCに関連する企画展を開催した。また，書店ではVOC関連書籍が美しくレイアウトされた特設コーナーに並べられるなど，まさに国中が祝祭ムードに包まれた。

ところが，一連のイベントのハイライトであった，女王も出席する設立記念日の公式式典に対して，

† 早稲田大学アジア太平洋研究センター特別研究員，日本学術振興会特別研究員.

内外のインドネシア人から批判の声が投げかけられた。在ハーグ・インドネシア大使は式典への招待を辞退し，在蘭インドネシア人留学生は式典のアトラクションへの出演依頼を拒否した。式典に反対する抗議デモがハーグでは在蘭マルク諸島出身者（後述）によって，ジャカルタでは現地の人々によって繰り広げられた。彼らの行動は，オランダの祝祭ムードに必ずしも好感を持たない人々もいることを明らかにした。その一方，一連の抗議行動に対して，オランダとインドネシアの双方で政府や学界から反応があった。それらはいずれも抗議行動に理解を示しつつ，オランダ人とインドネシア人の対話を促そうとするものであった。

本報告では，2002年をオランダとインドネシアで過ごした筆者の経験をもとに，VOC400周年記念行事がどのような性格のものであったか，インドネシア人はそれにどのように抗議したのか，彼らの抗議行動に対する反応はどのようなものであったか，そして両国のメディアはこの問題をどのように報道していたかを紹介する。一連の出来事は，過去を記憶するという行為が，歴史認識を異にする人々の間ではしばしば困難となることを明らかにした。ここでは，そうした異なる歴史認識がどのような歴史的過程の中で生まれたのか，そして様々な立場を超えて過去と向き合うためにはどうすべきかという問題を考察したい。

VOC400周年記念行事とその性格

オランダでは，2002年3月20日のVOC設立400周年に1年あまり先立って，それを「官民共同で祝」い，「祝福する（中略）諸活動を促進，調整，支援」することを目的に，VOC400周年記念協会（Stichting Viering 400 Jaar VOC，以下「協会」）が設立された。これは政・財・学界の代表からなる7名の諮問委員会と5名の執行部から構成され，オランダを代表する有力企業が出資した。同協会は全国各地で行われる記念行事の情報を総括した他，各地の記念行事に一部資金援助するなど，国を挙げて祝典の気運を盛り上げる最も重要な推進役となった[1]。

このように，同協会は最初から，VOC 400周年を「祝福するviering」ことを意図して設立されており，従って同協会の活動目的は「祝典の目的」として述べられている。これは一連の記念行事の性格を知る上で重要であるので，ここで立ち入って分析してみたい。「目的」は，以下の四つに要約されている。

—VOC設立を祝祭的に記念する (feestelijk herdenking)
—現在と未来に結びついた歴史的視点から，VOCの国際性とオランダの経済，文化的発展における意義を喚起する
—オランダの未来における国際性，起業家精神，ワークマンシップの重要性を示し，強調する
—海洋的，通商的国際貿易国家，およびヨーロッパの門戸としてのオランダを提示する[2]

第一の項目に用いられているherdenkingと，同協会の名称にも用いられているvieringという語は，やがて記念行事の性格を決定づけるキーワードとなった。Herdenkingは語源的には「再考re-thinking」の意味であるが，英語のcommemorating（記念する，ともに記憶する）の意味で使われる

ことが多い。祝典的な記念行事に批判的な人々は，様々な立場の人がVOC設立を「記念する/ともに記憶する」ようにすべきであると主張して，herdenking, commemoratingのための記念行事を提唱した。一方，vieringはcelebrating,「祝う」の意味であり，記念行事にオランダ人以外の視点を取り入れることをあまり重視しない人々によって用いられた。第一の項目ではherdenkingを使用しており，一見批判派の見解を取り入れているように見える。しかし，ここにあるようにfeestelijk herdenking（英語に直訳するとfestive commemorating）といった場合，辞書の訳はcelebratingであり，オランダ人もここには「祝う」というニュアンスしか感じられないと言う。協会は，一連の記念行事において400周年を「祝福する」ことを最も重要な目的としていたと言える。

第二の項目では,「歴史的」視点という語こそ用いられているが，これには「現在と未来に結びついた」という限定がついており，むしろ歴史性は弱められた印象を受ける。全項目において言えることだが,「目的」の中で，歴史的（或いは歴史学的）探求を深めることは重視されていない。むしろ，歴史上の出来事に関する行事であるにも関わらず,「未来」という語が多用されているのが目立つ。ここで重要とされているのは，VOCという過去を未来に活かすことである。

第三と第四の項目は，それぞれ国内向け，国外向けのメッセージと取ることが出来よう。国際性，起業家精神，ワークマンシップはVOCの栄光を語る際に多く使われる用語であるが，第三の項目では，これらを未来に役立てようと国内の人々に呼びかけている。一方第四の項目では，VOCの性格を描写したと思われる「海洋的，通商的国際貿易」という語を国家にまで拡大使用し，ヨーロッパの門戸としてのオランダ国家の重要性を海外にアピールしている（またはアピールすることを人々に推奨している)。

従ってこの「目的」で強調されていることは，VOCの栄光を祝福し，それを未来に活かすことである。VOCの栄光的側面は国家にまで敷衍され，VOCの記憶を国家のレベルで共有することが呼びかけられている。一方，全く欠けているものは，VOCの負の側面に注意を払うことである。後に記念行事に反発する人々は，VOCがアジア各地で武力を行使し生産物の供出を強要して現地住民を苦しめていたことを指摘したが,「目的」はそうした側面には全く触れていない。このように，オランダのVOC記念行事は，内向きでナショナリスティックな目的を持っていたと言えよう。

もっとも同協会が，在蘭マルク諸島出身者がVOC記念行事に対して行った抗議行動にも一部出資していることに触れないのはフェアでないだろう。諮問委員会メンバーの一人は,「抗議行動も，我々が支援するVOC関連行事の一部だ」と語ったが，その真意はあまり明らかでない[3]。穿った見方をすれば，自身の開かれた姿勢をアピールすることや抗議団体の懐柔を図ったとも取れるかも知れない。いずれにしても，協会は反対意見に対し寛容であることを示そうとしたと言えよう。

協会ホームページによると，VOC400周年関連のイベントは2002年中，全国25都市で108件開催された。VOC関連の出版物は，この年新たに出版もしくは復刊されたものだけで21冊を数えた。ちなみにオランダは，九州地方に面積でほぼ等しく人口で僅かに上回る[4]ほどの規模なので，このお祭り騒ぎがどれほどのものであったか想像出来よう。

全国の美術館・博物館では，VOC関連の展覧会が2002年中に46件企画された。展覧会は企画者の意図を分かりやすく観衆に示すので，展覧会の分析はVOC記念行事の性格を確認することになろう。

幾つかを実見した筆者の印象と，協会ホームページに挙げられた各展覧会の紹介によれば，その内容は以下のように分類できる。

—VOC の活動と発展を紹介するもの　15
—VOC に関係する個人の活動を紹介するもの　9
—VOC に関連する品を紹介するもの[5]　10
—アジアからもたらされた物品を紹介するもの　13
—アジアの一地域と VOC の間の戦争を紹介するもの[6]　1
—その他，分類不能　1
（テーマが複数にわたると考えられるものはテーマの数を数えているため，上記の合計は展覧会総数を上回る。）

分類が非常に難しく，筆者の恣意性を免れないことを差し引いても，展覧会のオランダ中心主義が見て取れよう。展覧会の目的からして，VOC やそれに関係したオランダ人の活動と発展が詳しく紹介されるのは当然である。しかしカウンターパートであるアジア各地域が，天然産品と工芸品の産出地としてしか描かれないことは注目に値する。ここにはほとんど個人が描かれず，社会の状況も僅かにしか触れられない。つまり，アジア各地域は，歴史的・文化的個性を持った主体としては描かれず，その産品にのみ際立った注意が向けられている。そうしたアジアの描き方は，未開の土地に雄飛したオランダ人の活躍ぶりと VOC の先見性，企業家精神を際立たせている。

しかしながら，アジアを直接見下したような描き方は全く見られないと言ってよい。それどころか，アジアの工芸品の技術がヨーロッパに勝り，アジアでしか産出されない品物がヨーロッパで珍重されたとされ，アジアへの礼賛が見られる。しかしこれだけ産品に注目しながら，その産品の収集の仕方，即ちそれがしばしば武力や強制を伴ったことが僅かにしか触れられないのは，バランスに欠けるのではないだろうか[7]。VOC が領土獲得よりも貿易の促進を重視したのは事実だが，貿易上の利益を上げるため，VOC が武力を背景に独占貿易の特権をアジア各地の支配者に強要したこと，また強圧的な生産統制を住民に課したことも事実である。そうした側面を十分見据えずに，VOC の貿易中心主義を強調することには違和感を覚える。

また多くの展覧会が，アジアの産品がヨーロッパの生活を豊かにしたことを強調している。しかしこのように描かれるアジア・ヨーロッパ関係と，後の植民地・宗主国関係のアナロジーは問題とされずに済むのだろうか。

このように，オランダで開催された VOC 関連展覧会は，VOC の活動を幅広い視点から歴史的に検討するものとはなっていない。世界に雄飛するオランダ人の姿がクローズアップされる一方で，アジアは単なる天然産品・工芸品の産地として，遠く後景にかすんでいる。これらの展覧会は，オランダ人の過去の栄光を確認するためのものであって，VOC の負の側面をも検討したり，そのアジア諸地域との関係を現在の歴史研究の水準から紹介したりするものではない。協会の「目的」に見られたオランダ中心主

義とナショナリスティックな性格が，ここに顕現したと言えよう。

こうした記念行事の性格とその異様とも言える盛り上がりは，例えば日本における朱印船貿易の開始やイギリスの東インド会社設立がここまで国民的規模では祝福されないことを考えれば，その特殊さが推し量られよう。このことはしばしば，VOC はオランダの「黄金時代 (Gouden Eeuw)」を象徴するためと説明される。しかし現在のオランダにおける VOC の意義は，むしろ「黄金時代」以後の国民の経験にあるように思われる。

「黄金時代」とはオランダにおいて，共和国の統一，商工業と交易活動の発達，さらに国際法・哲学・芸術などの分野において世界をリードする発展がみられた 17 世紀を指す。ところが 17 世紀にオランダの協力相手でありライバルでもあったイギリスがその後も産業革命と国際政治をリードし，20 世紀に至るまで大英帝国を発展させたのと比べると，オランダのその後の凋落は著しかった。18 世紀には英蘭戦争と内戦で疲弊した末にフランスに併合され，19 世紀の独立回復後も，低地諸州（後のベルギー）の併合と分離に伴い，政治的・経済的混乱が続いた。20 世紀には第二次世界大戦時にロッテルダムを始め幾つもの都市がドイツ軍の攻撃によって破壊された上，国全体がその占領下に置かれた[8]。すなわち，オランダ人にとっての 17 世紀は，彼らがその後長い苦難を経て振り返った，短い「黄金の時代」である。オランダの「黄金の時代」はすぐに「苦難の時代」に引き続かれ，その苦難が国民的規模で経験されたために国民の記憶となった。「黄金の時代」は，「苦難の時代」と対になることによって作り出されたと言えよう[9]。

オランダ各地の商人が出資して設立された VOC は，本来決してナショナルな存在ではない。ところが，その後幾多の苦難を経たのち，過去の栄光を求める人々によって，それは「黄金の時代」の先駆けもしくは象徴として，ナショナルなものにされたのである。ナショナルなイメージを付与された VOC の栄光は，現在も一連の記念行事や企画展を通じて，オランダ人の意識の上に新たに刻印され続けている。

インドネシア人による抗議行動

オランダで VOC400 周年記念行事に対する抗議行動を展開したのは，オランダに定住するマルク諸島出身者と，短期滞在中のインドネシア人であった[10]。マルク Maluku（旧名モルッカ Moluccas）諸島はインドネシア東部，スラウェシ島とニューギニア島の間に散在する島々で香料諸島とも呼ばれ，古くから稀少な香料を産出することで知られた。VOC は当初からマルク諸島を最も重要な交易品供給地の一つと見なして支配を強め，またバタヴィア（後のジャカルタ）には総督府を置いてアジアにおける活動拠点とした。さらにオランダはその後二十世紀初頭までに現在のインドネシア全土を支配化に収め第二次世界大戦まで植民地としたため，これらの人々がこの問題に最も敏感になったのは不思議ではない。

ここで，オランダにマルク出身者が多く定住している背景に触れておきたい。マルク諸島の中でも特にアンボン島を中心とする一帯は，香料取引の独占を意図する VOC によって，17 世紀初頭からその直接支配が試みられた。オランダ支配の過程でアンボン人にはキリスト教徒が増えたが，植民地時代

(1799-1942, そのうち 1811-1816 はイギリス植民地) になると，植民地軍 (KNIL) に入隊したキリスト教徒アンボン人には，イスラム教徒の多い他地域のインドネシア人に対抗させるため，植民地政府によって軍内部で特権的な地位が認められた。彼らは常にオランダに忠誠を誓い，独立戦争 (1945-1949) に至るまでオランダの側について，独立を目指すインドネシア人と戦った。従って独立を果たしたインドネシアは彼らのかつての敵であり，しかも彼らの目にはジャワ人・イスラム教徒中心の国家と映った。そこでマルクの人々は，自らの生活と地位を守るためにインドネシアへの編入を拒み，1950 年に南マルク共和国をアンボンに樹立した。しかしこれはすぐにインドネシア共和国軍によって鎮圧され，独立派アンボン人はオランダへの亡命を求めた。この際オランダは人道的措置として亡命者を多数受け入れたため，彼らはオランダに定住し現在まで結束力の強いコミュニティーを形成している[11]。

一連の VOC 関連行事に対する在蘭インドネシア人の反発は，在ハーグ・インドネシア大使館の声明によって公に知られるところとなった。同大使館は 2002 年 2 月 19 日，インターネット上の公式サイトに「オランダ東インド会社 400 周年に対するインドネシアの視点」という文章を掲載した。その中で同大使館は，VOC の活動はその当初から武力に依拠するものであったと批判し，インドネシアはその設立を祝う立場にはないと表明した[12]。

2 月下旬には，VOC 400 周年公式記念式典におけるアトラクションである，VOC とアジア人の出会いを象徴的に再現する短い史劇に出演を依頼された在蘭インドネシア人留学生 3 名が，出演を拒否した。彼らは，所属する大学の教授が協会諮問委員会のメンバーであったことから，式典アトラクションへの出演を依頼されたものである。式典のもようをテレビで観た筆者の印象では，その史劇はきわめて抽象的に作られており，事実を再現すると言うよりは，式典に詩的，幻想的な色彩を加えることが意図されている。その中で，アジアのある国（インドネシアが暗示されている）で，現地の人々が VOC のオランダ人に交易品もしくは貢物を運ぶシーンがあり，それらを運ぶ人夫の役をアジア人が演じている。シーンは静謐かつ夢想的に演出され，VOC とアジアの平和的な関係が暗示されている。

留学生の一人は既に同記念式典の性格を伝え聞いており，その式典がその後の植民地支配との関係をまったく考慮することなく，VOC 設立をオランダ人の視点からのみ祝うものであると判断して，その主旨への不賛同の意を表するために出演を拒否した。もう一人の留学生はリハーサルまで参加したが，自分が人夫の役であることに屈辱感を覚えたことと，VOC がアジアでしばしば武力を行使した事実が劇にまったく反映されていないのを不満に思ったことから，出演を断ることにした。さらにもう一人の留学生が拒否した理由は興味深い。彼は出演が依頼される少し前に，偶然，アブドゥル・イルサン Abdul Irsan 在ハーグ・インドネシア大使が彼のインドネシア人の友人宛てに書いた私信を目にした。イルサン大使は，オランダに住む複数のインドネシア人に対して，各地で行われている VOC 記念式典の性格には十分注意するようにと呼びかけていた。彼はこのように警戒されている式典に自分が参加し，しかも史劇にまで出演すれば，彼がオランダ人の歴史観に同調していると他の在蘭インドネシア人が受け取ることを恐れた。このことは，記念行事に関する警戒心が，すでに在蘭インドネシア人の間で広がっていたことを意味している[13]。

3 月 2 日の新聞報道は，在蘭マルク諸島出身者の団体 DLM が，VOC400 周年記念式典に反対するサ

イトをインターネット上に立ち上げたことを伝えている[14]。DLM（Djangan Lupa Maluku インドネシア語で「マルクを忘れるな」の意）は，オランダに存在する様々な在蘭マルク出身者団体の連絡を図る目的で 1996 年に設立され，在蘭マルク出身者の間の情報交換とマルクにおける人権抑圧への関心を喚起することを目的としている。彼らはそのサイトで，マルクにおいて VOC がどのような侵略と抑圧を行ったかを示し，VOC 設立を祝う式典に疑義を表明した。

式典が近づくとインドネシア政府は，それに公式代表を出席させるのは好ましくないとの見解を表明した[15]。イルサン大使は取材に対して，「もしあなた方の国を占領した国がその占領を一緒に祝おうと求めたら，あなた方はどう反応するだろうか？」とオランダ人に疑問を投げかけた[16]。

記念式典は 3 月 20 日予定通り，女王他皇室のメンバーや首相を含む政府首脳も出席して，ハーグにある公式式典場 de Ridderzaal で行われた。問題の史劇も，他国出身の留学生やエキストラが参加して演じられた。インドネシアからは現内閣の重鎮，クウィック・キアン・ギー Kwik Kian Gie 国家開発企画庁 (BAPPENAS) 長官が派遣された。もっとも彼がその肩書きを用いず，私人としての立場で出席したことは，この式典に対するインドネシア政府の複雑な姿勢を示している。オランダ留学経験のあるクウィックは流麗なオランダ語でスピーチを行ったが，「VOC はインドネシアに近代化をもたらした反面，抑圧，搾取，権力濫用の組織としての側面もあった」と述べるなど，バランスを取ることに努めながらも，VOC の抑圧的性格を批判した。

同日ハーグ市内では，在蘭マルク諸島出身者などが中心となって，公式記念式典に反対するデモが展開された。式典の様子や市内のデモの映像は，国営放送 Nederland 2 によって全国に放映された。クウィックの批判的演説に女王を始めオランダ人参加者たちが複雑な表情を示した光景は，テレビを見た在蘭インドネシア人の間で喝采をもって迎えられたという。

以上が，3 月 20 日の公式記念式典の前後にオランダで起きた，VOC 記念行事に対する抗議行動の概要である。行動の担い手は二つに分けられる。一方は在蘭期間の長いマルク諸島出身者であり，他方は様々な地域出身の，大使や留学生といった在蘭期間の短いインドネシア人である。この二つのグループの間で，協調行動は全く取られていない。かつて南マルク共和国独立支持派が実際にインドネシア共和国軍と戦火を交えた歴史から，その後オランダで定住したマルク出身者と，留学その他の目的でオランダを訪ねてくるインドネシア人が親しく交流することは現在もない。加えて在蘭マルク出身者は二世，三世の時代となり，彼らの母語でのコミュニケーションは既に困難になりつつある。

在蘭マルク出身者は，VOC が 17, 18 世紀にマルクを支配，搾取したことを批判している。17 世紀初頭から VOC の直接支配下に置かれたマルクでは，その武力強制を伴う生産管理に住民が苦しめられた。従ってそのように彼らの祖先に苦難をもたらした VOC の設立記念を祝福することに，彼らは反対すると主張する。

ところが今日在蘭マルク出身者が置かれている特殊な立場は，むしろ VOC 解散 (1799) 後のオランダとの関係によって形成されたものである。植民地軍 (KNIL) の重要な構成員としてオランダに協力し，独立戦争までオランダの側について戦った彼らは，独立を果たしたインドネシアではそのために安住の地を失った。オランダは亡命者を多数受け入れはしたものの，彼らが期待した独立支持は与えなかった。

その後在蘭マルク出身者の一部過激派は，アムステルダムのインドネシア領事館占拠事件(1975)やオランダ北部での列車乗っ取り事件(1977)などの暴力行動を起こし，インドネシア及びオランダ政府にマルクに対する即時独立支持を求めた。しかしいずれもすぐにオランダの警察によって鎮圧され，逆に在蘭マルク出身者社会がオランダ人の支持を失う結果となった。従って現在の在蘭マルク出身者による記念行事に対する抗議行動は，17, 18世紀のVOCの活動に向けられているものの，そこに近年の彼らのオランダにおける疎外感，閉塞感が反映していることは間違いないであろう。

これに対し在蘭期間の短いインドネシア人は，VOCの活動が後の植民地支配の嚆矢であったことを強調する。彼らにとって抑圧の記憶は植民地時代に集約されており，VOCがこれに連続していることに反発しているのである。VOC時代にオランダは既にジャワの一部などで領域支配を始めていること，またジャワのプリアンガン地方でVOC時代に行われた強制供出制度（プリアンガン制度とも呼ばれる。1711または1723から1916。）が植民地期の強制栽培制度(1830-70)のモデルになっていることなどから，彼らの主張する，支配と搾取におけるVOCと植民地政府の連続性は歴史的に正しいものである。さらにインドネシアは四年に及ぶ独立戦争でオランダを相手に戦っており，こうしたVOC後の歴史経験が，彼らの抗議行動に強く反映していると言える。

マルク出身者と他地域出身のインドネシア人という二つの在蘭インドネシア系グループは，VOC400周年記念行事に対して，一見共通するように見える抗議行動を取った。ところが両者の抗議行動は，それぞれVOC時代以後の歴史経験に起因しているため，両者の異なる歴史経験が彼らの共闘を妨げたと言えよう。

VOC記念行事に対する抗議行動は，時を経ずしてインドネシアでも始まった。2002年3月頃，10の独立系団体が集まって，「インドネシア民族の尊厳擁護のための全国委員会(KNPMBI, Komite Nasional Pembela Martabat Bangsa Indonesia/National Committee for the Defense of the Dignity of the Indonesian Nation)」という組織が，ジャカルタで結成された[17]。これら10の団体とKNPMBI代表のバタラ・R. フタガルン Batara R. Hutagalung に関して，それ以前の活動は何も知られていない[18]。KNPMBIは3月20日のVOC設立記念日に合わせ，在ジャカルタ・オランダ大使館宛に声明を出した。これによると「VOCの設立は植民地支配の始まり」であり，「一連のVOC記念行事はインドネシア人民の貧困，苦しみ，数十万の死の上に祝祭を行うもので，インドネシア民族の尊厳を大きく傷つける」ものであるとされた。KNPMBIはこの声明の中で，次の三つの要求をオランダ政府に対して行った。その内容は1. 過去の植民地支配と，特に1945年8月17日以降行われたインドネシア人民に対する様々な人権侵害への謝罪，2. オランダ政府並びにオランダの諸機関に対するインドネシア共和国政府の負債の取消，3. インドネシアの富の搾取ならびに数十万人のインドネシア人民虐殺に対する賠償というものであった[19]。

同日，KNPMBIのメンバー約10人は，在ジャカルタ・オランダ大使館の前でVOC記念行事に対する抗議デモを行い，上記の要求を繰り返した。デモは平和裏に行われ，混乱はなかったもようである。KNPMBIメンバー以外のデモ参加者は伝えられていない[20]。

続いて4月1日には，KNPMBIはオランダの有力銀行ABN-AMROのインドネシア総支配人に対し

て，抗議文を提出した。これは，オランダのVOC400周年記念協会の出資企業である同行が，インドネシアの同行支店を通じてインドネシア人の金をもVOC記念行事に回しているとして，同行の協会への出資に抗議したものである。KNPMBIは同日インドネシア人に対しても，ABN-AMROを利用しないように，また同じく記念協会出資企業の一つでインドネシアでも愛飲者の多いオランダビール，ハイネケンを飲まないよう呼びかけた[21]。

インドネシアのメディアを見る限り，インドネシアにおけるVOC記念行事に対する抗議行動は，KNPMBI以外には広がっていない。記念行事が海外の遠い国で行われ，国内に深刻な問題が山積している限り，広く一般市民が抗議行動に参加するまでには至らなかったと言えよう。

KNPMBIの要求は，実はVOCとのつながりは弱い。その声明文や要求からも分かるように，この団体にとって重要なのは植民地時代と，とりわけ独立戦争期にインドネシアが払った犠牲であり，VOCはその時代と連続性を持つということで問題となる。彼らは独立戦争期のインドネシアの犠牲に対し賠償金が払われていないこと，オランダ軍によるインドネシア人に対する人権侵害に対し裁判が行われていないことを何度も強調し[22]，実際に賠償金支払いと裁判の実施を要求するため，事実究明チームを組織して，1945–50年にオランダ軍が行った人権侵害の調査を始めてもいる[23]。彼らにとって被害者としての記憶は独立戦争期に集約されており，それが十分に償われていないという思いが，VOC記念行事に刺激されて表に現れて来たものと見ることが出来よう。

このように，4月初めまでのKNPMBIの要求と行動は，やや過激で，かつ賠償や不買運動といった経済的対象に結びついていた。ところが間もなく彼らはオランダ側と対話を始め，相互の文化・学術的交流に向けた努力へと行動を急転させる。これについては次節で取り上げることにしたい。

抗議行動の反響と対話の始まり

興味深いことに，VOC記念行事に対する抗議行動は，オランダではその後，アジア各国出身者やオランダ人の歴史研究者等による学究的取り組みとして収斂されていった。先に紹介したDLMは4月13日，アムステルダムのオデオン劇場において「何を祝おうとしているのか？(Wat valt er te vieren?)」と題するシンポジウムを開催し，オランダ，マレーシアの著名な歴史学者，人類学者を招き，きわめて学術的な討議を行った。招待された王立言語地理民族学研究所(KITLV)の史料部長ヘリット・J.クナープGerrit J. Knaapは「VOCは領土支配の野望を持っていた。しかし武力だけで交易が成り立っていた訳ではない」と発言，国立戦争資料研究所(NIOD)のレムコ・ラーベンRemco Rabenは「奴隷交易など，VOCの負の側面はこれまで十分に研究されていない」と述べるなど，抑制の利いた口調ながら，史料に基づく研究者としての立場から，VOCの領土支配や過去の歴史研究の偏りを明らかにする発表を行った[24]。

2002年6月24日には，当時フランスの社会科学高等研究院(EHESS)の所長を務め，アムステルダム大学に客員教授として招かれていたインド経済史学者サンジャイ・スブラーマニヤムSanjay Subrahmanyam（現在はオックスフォード大学教授）が，アムステルダム大学において「VOCを祝うのか，それとも記念するのか？(Celebrating or commemorating the VOC?)」と題するパネルディス

カッションを行い，オランダの著名な歴史学者及び協会諮問委員会のメンバーを招待して討論を行った[25]。このディスカッションでスブラーマニヤムは，「歴史を一方の視点から見て祝うのではなく，複数の立場の人々が記念/ともに記憶する方法を探るべきだ」との見解を示したという。

このようにオランダでは，オランダの歴史認識をめぐるアジア人の反発を，オランダとアジア各国間の学術的対話として止揚させようとの試みが行われた。ここでは，国内外の一線の歴史研究者が参加またはイニシアティブを取り，今現在の問題である歴史認識をめぐる軋轢を，学術的討論に持ち込んだことが注目に値する。討論が解決策を提示出来たわけではないが，歴史家の史料調査に基づく見解が，立場を異にする人々が互いに相手の意見を理解する上で重要であることは言うまでもない。DLM が主催したシンポジウムには，政府の補助も出されていた。この施策を，在蘭マルク出身者に対する政府のリップサービスに過ぎないとする一部の主張[26]も一面では正しいかも知れないが，学術的対話を尊重する政府の姿勢はやはり評価されるべきであろう。

インドネシアでも，抗議行動は一転して対話へと展開した。KNPMBI の第二回プレスリリースによると，在ジャカルタ・オランダ大使館は 3 月 22 日までに，KNPMBI に対し逆提案を行った。その内容は，同大使館と KNPMBI が共催で VOC に関する国際セミナーを開き，VOC の負の側面も含めて討論を行うことを呼びかけるものであった。KNPMBI はこのオランダ側の提案を 3 月 22, 23 日と二日にわたる会議で慎重に討議し，最終的にこれを了承した。そしてインドネシア・オランダ双方からのメンバーで構成される組織委員会の設置を大使館に呼びかけることを決定した[27]。この時から，KNPMBI と在ジャカルタ・オランダ大使館は急速に協力関係を構築していった。

4 月 3 日には，KNPMBI とスヘルト・ファン・ヘームストラ Baron Schelto van Heemstra 在ジャカルタ・オランダ大使の直接会合が行われた。大使はまず，KNPMBI の要求に対しオランダ本国からの返答が得られないことの弁明に努めた。ところが KNPMBI 側は要求の内容をこれまでから急転させ，過去を掘り返すことよりも若い世代の交流を図る方がより重要だと発言した。そしてイ・蘭間の学術・文化交流を促進するための 6 つの提案を行った（1. 留学生の交換，2. そのための奨学金創設，3. 芸術団体相互派遣の促進，4. 文化公演の交換，5. 映画の交換，6. それぞれの国における本の出版と翻訳）。ヘームストラ大使はこの提案を快諾し，早速インドネシアで組織委員会を創設しようと応じた。

この会合で VOC に関する国際セミナーについても話し合われ，オランダからも講演者を呼ぶこと，エラスムス・ハイス Erasmus Huis（在ジャカルタ・オランダ政府文化センター）も企画に加わることなどが決定された[28]。会合はその後も回を重ね，講演の内容，オランダ，インドネシアから招かれる講演者（企画者以外は皆歴史学者）の顔触れ，スポンサーなどが決められていった[29]。

こうした話し合いの末，9 月 3, 4 日にジャカルタにおいて国際セミナー「VOC, 世界初の多国籍企業の二つの側面 (Verenigde Oost-indische Compagnie (VOC), The Two Faces of the World's First Multinational Company)」が開催された（会場はホテル・ムナラ・ペニンスラ Hotel Menara Peninsula）。主催者には，KNPMBI と在ジャカルタ・オランダ大使館の他に，インドネシア歴史家協会 (Masyarakat Sejarawan/Indonesian Historian Society) ジャカルタ支部が名を連ねた。KNPMBI 代表のフタガルンは，「過去に対して不満を抱くことなく，調和のある共存を図るため，オランダとインドネシ

アの若い世代に包括的，客観的かつ正確な情報を提供すること」がこのセミナーの目的であると述べた[30]。

ところが会場に姿を見せたインドネシア人は中高年が大半で，若い世代は数えるほどしかいなかった。オランダ人の聴衆は当然少なく，大半はプレス・外交関係者かと思われた。オランダから招かれた講演者は，四十代後半の一人を除く残りの三人が五十代，インドネシア人講演者六人も一人が四十代，他は五十–七十代であり，若い世代への情報提供という目的は実現されなかった。

セミナーでは，インドネシア人講演者によってVOCの暴力性と植民地支配への連続性などが指摘される一方で，オランダ人講演者の内容はVOCの性質を中立的に説明するものや政治的に無難なものが目立った。講演の題目は，企画者であるKNPMBIと在ジャカルタ・オランダ大使館によって決定されて講演者に依頼されていたが，実際の講演内容はインドネシア，オランダの双方において講演者によって対決色の弱いものに変更されていた。特にオランダ側でその傾向が強く，例えば「アジア，特にインドネシアにおける王朝内の抗争に対するVOCの施策」と予定されていた講演は[31]，当日は「インドネシアに残るVOCとの関係を示す18世紀の記念物」に変更されていた。しかも講演は連続して行われるのみで講演者同士の討論の場は設けられておらず，フロアからの質問も，両国の歴史認識の相違を明らかにし議論を深めるところからは程遠いものであった。会場の周りにデモ隊が集結することもなく，オランダにおけるこの種の議論との温度差を感じざるを得なかった。

その中で，インドネシアのエイドリアン・B. ラピアン Adrian B. Lapian が行った，オランダとインドネシアの歴史学者が，同じテーブルについて互いの歴史教科書を検討しようという呼びかけは意義のあるものと言えよう。過去の同じ出来事がオランダ人とインドネシア人によって異なって記憶されている例を挙げた後，彼は「暗いエピソードにも誠実に向き合えば，歴史上の互いの役割や行為を新たに認識し，暴力的衝突につながることのない共通の記憶を形成する方法と手段が見つけられるだろう」と発表を結んだ。

ラピアンはその後，10月に始まったオランダ国立博物館の企画展「オランダのアジアとの出会い：1600–1950 (De Nederlandse ontmoeting met Azië, 1600–1950)」の開幕式に招待され，スピーチを行った。彼は9月にジャカルタで行ったと同様に，インドネシアとオランダの歴史学者の対話を呼びかけ，会場から共感を持って迎えられた。

このようにインドネシアにおいても，VOC400周年記念行事に対する抗議行動は，その後学術的な対話へと展開した。一連の動きの中ではまず，在ジャカルタ・オランダ大使館が，素性の知れない一民間抗議団体に対して国際セミナーの共催を持ちかけたことが注目に値する。一見驚くべき対応にも見えるが，セミナーという公開の対話の実現は，現地の人々からの抗議に対する在外公館の対応として，きわめて政治的に正しいものとの判断はあったことだろう。ヘームストラ大使は当初，KNPMBIの抗議に対して本国から正式の返答がないことを弁明していたが，この件は4月の会合以来，セミナーの準備に紛れて全く問題とされなくなった。やや穿った見方をすれば，同大使館としてはセミナーを呼びかけることによって，賠償を含むKNPMBIの急進的要求をかわし，問題の平和的解決を図ったと言えるかも知れない。そうすると彼らにとってセミナーは，開催したことが既に成果なのであって，その質まではあ

まり問題とされなかったと言える。

先述のように，KNPMBIを構成した10の団体も代表のフタガルン自身も，今回の出来事以前には，その活動をほとんど知られていなかった。それ故にKNPMBIは，支持者の反発を気にすることなく，抗議から対話へと大きく方針を転換することが出来たと言えよう。ここでも穿った見方をすれば，インドネシアとオランダの著名な研究者を招くセミナーを実現することは，無名の団体であるKNPMBIがその存在感を示すことに役立つとの計算もあったかも知れない[32]。

このようにインドネシアにおける学術的対話は，KNPMBIというインドネシアの政治的抗議団体と在ジャカルタ・オランダ大使館というオランダ政府在外公館との間での折衝を通じて生まれたもので，研究者による自発的な取り組みではなかった。KNPMBIにとっても在ジャカルタ・オランダ大使館にとっても，セミナーの開催そのものが誇るべき成果であって，学究的議論を深める目的は当初から影が薄かった。KNPMBIは大使館との交渉を通じて抗議団体としての性格を薄め，セミナーの成功に向けて努力するようになった。KNPMBIが主催者に回ったため，そのメンバーがセミナー自体に抗議することもなかった。このような背景からセミナーは，抗議団体による異議申し立てという意味でも学究的な意味でも，盛り上がりに欠けるものに終わった。

しかしその政治的な思惑はともかくとして，対話を実現したKNPMBIと在ジャカルタ・オランダ大使館の交渉能力と実行力はやはり高く評価されるべきものである。セミナーの企画の途中ではインドネシア・オランダ間の文化・学術交流が提案され，セミナーではラピアンの有意義な呼びかけが行われた。2日間のセミナーの質を問うことよりも，これらの提案や呼びかけをこれからどう実行していくかが，両者の対話の真の価値を測るものとして，今後より重要となろう。

メディアの報道

オランダのメディアは各地の記念イベントを紹介した他，自身でもしばしばVOC特集を組み，祝祭の雰囲気を盛り上げるのに一役買ってきた。その陰に隠れてやや目立たないとはいえ，記念行事に対する抗議行動も伝えられ，また記念行事の性格をオランダ人が批判する記事も見られた。

2002年3月19日，企業人に広い読者を持つ日刊紙NRCハンデルスブラット *NRC Handelsblad* は，国立博物館学芸員で同館の企画展「オランダのアジアとの出会い：1600–1950」の責任者でもあるケース・ザンドフリート Kees Zandvliet の投稿文を掲載した。この中で彼は「VOCと，19世紀以降インドネシアを支配した植民地政府には確かに連続性があるにも関わらず，オランダ人は植民地の過去を直視せず，VOCのロマンティックな過去だけを祝おうとしている」として，在蘭マルク出身者と在蘭インドネシア人による記念行事抗議行動に理解を示し，またオランダの一連の記念行事を，「過去を遊園地化している」と批判した[33]。社会派として知られる日刊紙ドゥ・フォルクスクラント *de Volkskrant* は3月21日，前日催された公式記念式典に関して，クウィック・キアン・ギーによる批判的演説や在蘭マルク出身者団体による抗議デモを詳しく報じた。そして記念式典は「インドネシア人にとってはあまりに祝祭的過ぎるものであった」と総括した[34]。

NRCハンデルスブラットも3月21日，記念式典は「在蘭インドネシア人および在蘭マルク出身者へ

の配慮に欠け，VOC の設立を祝福するものだった」と総括した。ところが同誌は，VOC の過去をロマンティックに回想する者と，抗議行動を行う者が同時に存在する状況を「ポルダーモデル（誰もが参加する方式）[35] の勝利」と肯定的に結論づけている。この記事が，協会諮問委員会のメンバーでもあった一議員による「記念式典に反対と賛成の両意見あるのはいいことだ」というコメントを特に詳しく伝えているのは，それが同誌の見解に近いことを示していよう[36]。

一般のオランダ人において，VOC 記念行事の身近さと比べれば，それに対する抗議行動は関心を引く問題とはなっていない。抗議行動はメディアを通じて知られているけれども，自分の生活に直結しない限り，異なる意見の存在は恐らくそれほど問題とはならないのであろう。NRC ハンデルスブラットの報道に見られるように，オランダにおいて意見の対立とは，緊急に誰かの利害や人権に問題を引き起こさない限り，むしろ肯定的に受け取られているように感じられる。実際 VOC400 周年記念協会やオランダ政府は，自らに抗議する在蘭マルク出身者団体に資金援助まで行い，相手を自分の側に取り込む姿勢を示した。これは確かに寛容な姿勢ではある。ところが実際には，異なる意見の存在を認めること，その相手との対話や協力を行うことだけで良しとされていると言えなくもない。VOC400 周年記念協会が抗議団体の要求を受け容れて基本方針を変更することはなかったし，ジャカルタのセミナーにおいてもオランダの世論においても，相手に対する寛容な姿勢は必ずしも，問題を深く見つめることや自己の姿勢を厳しく批判的に見直すことにはつながってはいない。

インドネシアでは概ね，VOC 記念行事に関わる出来事は，オランダに対し批判的な視点から報道されている。高級日刊紙コンパス *Kompas* は 3 月 25 日，KNPMBI メンバーによる 3 月 20 日の抗議デモを報じた他，デモ参加者の「VOC はインドネシアに貧困と苦しみをもたらした植民地支配の嚆矢である」との主張や，イルサン大使，クウィック長官の VOC 批判などを詳しく伝えている[37]。同誌の 3 月 28 日の記事は VOC の歴史を詳しく紹介しているが，その中では VOC の行った強制的生産管理や 1622 年のバンダ島における住民虐殺などが強調されている。同日の別の記事は，オランダの VOC400 周年記念協会が，有識者の好む「記念する/ともに記憶する herdenking」ではなく「祝う viering」という語を選んだこととその背景を報じるなど，オランダにおける記念行事の性格を伝えることにも留意している[38]。

もっともインドネシアにおける VOC 記念行事関連の報道は，3 月 20 日のデモが一民間テレビ局で放映されたのを除けば，コンパス以外のメディアに現れることは皆無といっていい[39]。遠いオランダで行われている記念行事は，植民地支配や独立戦争の犠牲の記憶と結びつけられることでインドネシアの一部有識者に関心を寄せられたが，そうされてもなお，広く市民の関心を惹くには至らなかったと言えよう。

おわりに

VOC400 周年記念記念行事は 2002 年中にほぼ終わり，それに対して内外のインドネシア人が取った一連の抗議行動も同年半ばには終息した。彼らの抗議行動が，オランダとインドネシアで広く一般市民を巻き込んだ論争にまで大きく展開することもなかった。しかしながら，一連の出来事が投げかける問題は決して易しくない。

現代のように情報が瞬時に交換され，異なる背景の人々が混じり合って住む社会では，あるグループが自らの歴史を，その栄光的一側面だけを取り上げて祝福することはもはや難しいことを，今回の出来事は明らかにした（これは，被害者としての一側面のみを追悼することが難しいことにも当てはまろう）。ある立場の人々にとっての栄光的側面は，異なる立場の人に犠牲をもたらしたかも知れない。多くの立場の人から栄光と捉えられる出来事も，同時に暗い側面を持つかも知れない。ある側面で被害者であった人々が，別の側面では加害者として他人を苦しめていたかも知れない。インドネシア独立を描いた日本映画『ムルデカ・17805』がインドネシア人から，日本を英雄として描きすぎたとして大きな反発を受けたことなどを想起すれば，今回のオランダとインドネシアにおける出来事は，日本にとっても決して無縁のものではない。あるグループの中でのみ通用する歴史認識で過去と向き合うことは，異なるグループの人々の心情を深く傷つける。過去と向き合う姿勢に関して，我々は今新たな発想を求められている。

今回のオランダ人の歴史観に対する抗議が，歴史研究者の参加する学術的討議へと発展したことは注目される。一般市民のレベルで関心を集めるには至っていない問題であるにも関わらず，特にオランダで研究者達は率先して議論を始め，世論を喚起しようとしているかに見受けられた。議論は決して結論や解決策を生み出していないが，史料を探求しあくまで学究的に議論を行うことは，異なる立場の人々が互いの意見を理解する上で有効な方法であると言えよう。従って，これからの時代に様々な立場の人が協調して暮らしていくために，過去と向き合う姿勢に関して我々歴史研究者が貢献すべきことは大きいのではないだろうか。このことは，特にいまだ世界中で多くの人々の心に深い傷跡を残す（しかし，しばしば一方の側の栄光として語られる）戦争の歴史ならびに植民地支配の歴史に向き合う上で，参考となるものと言えよう。

在蘭マルク出身者，在蘭インドネシア人，及びインドネシア国内のインドネシア人による抗議行動は，それぞれの異なる歴史経験に起因していた。しかし共通していることは，それがVOCに対する異議申し立てであるにも関わらず，異議を申し立てる契機は，VOC以降の歴史経験によって形成されていることである。VOC記念行事は，彼らのより身近な被害の記憶を呼び覚ますことで，抗議行動を招いた。オランダ人のVOCへの熱狂においても，VOC以降の歴史経験が重要な役割を果たしている。ある時点の記憶は，その後の歴史経験によって形成され，そうして形成された記憶は，祝福，記念，追悼といった，過去と向き合う行動によって後の時代も人々の心に刻印されていく。

一連の抗議行動は，それほどの広がりを見せないうちに終息した。しかし，問題は決して解決していない。内外のインドネシア人，在蘭マルク出身者が，過去の虐げられた経験を記憶し続け，それが未だに償われていないと感じている限り，今後も色々なきっかけがその思いを刺激し抗議を再発させることだろう。今回の出来事を一過性のものと見なすのでなく，一連の出来事を通じて生まれてきた学究的議論という可能性にまず歴史研究者が真摯に取り組み，市民の参加を促すのでなければ，過去と向き合うことは今後常に争いの要因となっていくことだろう。

注

1. 同協会が作成したホームページ「VOC400 周年を祝う：1662–2002 (Viering 400 Jaar VOC, 1602–2002)」(http://www.voc2002.nl/), および同タイトルの協会リーフレット．ここには，全国で行われる一連の記念行事に関する情報も載せられている．
2. 上記の協会ホームページおよびリーフレット．
3. 諮問委員会メンバー談，2003 年 1 月．
4. オランダの約 1,607 万人（2002 年）に対し，九州は約 1,476 万人（2000 年）．
5. VOC の船をモチーフにした磁器や，VOC で使用されたコインの展覧会など．VOC ブームに乗ることが最重要視されたと思われる，やや意義の乏しい企画も少なくない．
6. ユトレヒトのマルク歴史博物館 Moluks Historisch Museum で開かれた企画展「大アンボン戦争，1651–1656 (De Grote Ambonse Oorlog 1651–1656)」は，VOC 関連の全イベントの中で異彩を放っている．同館ホームページによると，この博物館は 1990 年，オランダ政府によって在蘭マルク出身者コミュニティーへのプレゼントとして設立された．
7. この点で，国立博物館の企画展「オランダのアジアとの出会い：1600–1950 (De Nederlandse ontmoeting met Azië, 1600–1950)」が VOC の武力行使や強制供出も説明しているのは，数少ない例外と言える．しかしその「オランダのアジアとの出会い」（英語に直訳すると Dutch encounter with Asia）というタイトルが象徴するように，この展覧会はアジアに渡ったオランダ人の行動を描くことに主眼が置かれており，アジアの側がどのようにその出会いを受け止めたのかは十分に伝えられていない．
8. 邦文で読めるオランダ史の概説書には，モーリス・ブロール（西村六郎訳）『オランダ史』白水社文庫クセジュ，1994；栗原福也監修『読んで旅する世界の文化　オランダ・ベルギー』新潮社，1995；森田安一編『スイス・ベネルクス史』山川出版社　1998 などがある．
9. 「黄金の時代」と「苦難の時代」の関係は他国の例でも確認出来る．16 世紀にヨーロッパの先陣を切ってアジアに進出したポルトガルは 17 世紀からは国民的苦難が続いたが，この国でも 16 世紀の海外進出はオランダと同様に熱狂的に回顧されるという．その一方で，東インド会社解散後も大英帝国が発展を続けたイギリスでは，その設立はそれほどまでには盛り上がらない．
   また「国民の記憶」の形成に関しては，藤原帰一が日本，アメリカ，シンガポールの事例で行った考察が示唆に富む（藤原帰一『戦争を記憶する–広島・ホロコーストと現在』講談社現代新書，2001）．
10. この 2 グループ以外による抗議行動は，オランダでは伝えられていない．オランダ国外では，インドネシアの他に，南アフリカ・ヨハネスブルグで，同国内で行われた VOC 記念行事に対して抗議行動が起こり，VOC の性格を問い直す国際会議が 2002 年 4 月に開かれた（*Kompas*，2002 年 3 月 25 日）．また同様の国際会議は，2002 年 9 月にシンガポールでも開かれた．
11. 邦文で読めるマルク諸島の歴史に関する文献には，生田滋『大航海時代とモルッカ諸島—ポルトガル，スペイン，テルナテ王国と丁字貿易』中公新書，1998 がある．南マルク共和国に関する邦文文献はないが，オランダ語で書かれたものに，ファン・デル・メルレン『1950 年アンボン関係資料：アンボンと南マルク共和国に関するオランダの対応』E. I. Van der Merlen. 1981. *Dossier Ambon 1950: de houding van Nederland ten opzichte van Ambon en de RMS.* The Hague: Staatsuitgeverij. がある．
12. 同大使館の公式サイトは http://www.indonesia.nl/
13. 筆者による 3 名の留学生へのインタヴュー，2002 年 6 月．
14. *de Volkskrant*, 2002 年 3 月 2 日．DLM のサイトは http://www.dlm.org/voc/index.html
15. *de Volkskrant*, 2002 年 3 月 18, 21 日．
16. ラジオネーデルランド・インターネット版，2002 年 3 月 20 日．http://www.rnw.nl/hotspots/html/netherlands020320.html
17. KNPMBI に参加した 10 団体は以下の通り．1. Aliansi Reformasi Indonesia, 2. Wirawati Catur Panca (Wanita Pejuang '45), 3. Exponen Pejuang Kemerdekaan RI & Generasi Penerus RI, 4. Komite Pemberdayaan Perekonomi Rakyat Seluruh Indonesia, 5. Wanita Tani Berdikari, 6. Lembaga Konsultasi dan Bantuan Hukum Pedagang Kecil dan Menengah, 7. Ikatan Buruh Madani, 8. Komite Nasional Pemberdayaan Budaya Bangsa, 9. Lembaga Swadaya Petani Mandiri, 10. Yayasan Kelompok Usahawan Kecil Kawasan Timur Indonesia. KNPMBI による第三回プレスリリース，2002 年 4 月 1 日．http://members.fortunecity.com/toleransi/bloody_voc3.html
18. フタガルンの個人的背景について，筆者は本人に直接メールで質問を試みたが，回答は得られなかった．
19. 上記声明文は，次のサイトで公開されている．http://members.fortunecity.com/toleransi/bloody_voc.html

20. *Kompas*, 2002年3月25日.
21. KNPMBIによる第三回プレスリリース，2002年4月1日．http://members.fortunecity.com/toleransi/bloody_voc3.html
22. KNPMBIによる在ジャカルタ・オランダ大使館宛声明文．http://members.fortunecity.com/toleransi/bloody_voc.html
23. 第二回プレスリリース，2002年3月25日．http://mail2.factsoft.de/pipermail/national/2002-March/003651.html
24. 同シンポジウムの概略は，http://www.dlm.org/voc/nl/index2.html に載せられている．
25. 同パネルディスカッションの概略は，http://www.pscw.uva.nl:80/asia/24062002-1.htm に載せられている．
26. 国立博物館学芸員ケース・ザンドフリート Kees Zandvliet の投稿文．*NRC Handelsblad*, 2002年3月19日．
27. KNPMBI第二回プレスリリース，2002年3月25日．http://mail2.factsoft.de/pipermail/national/2002-March/003651.html
28. KNPMBI第四回プレスリリース，2002年4月4日．http://members.fortunecity.com/toleransi/bloody_voc4.html この時点におけるKNPMBIの方針転換の理由についても，筆者はフタガルンにメールで質問したが，回答は得られなかった．
29. KNPMBI第五，七回プレスリリース，2002年4月11日，6月25日．http://members.fortunecity.com/toleransi/bloody_voc5.html; http://mail2.factsoft.de/pipermail/national/2002-July/006515.html
30. 同セミナーリーフレット，p. 2.
31. KNPMBI第五回プレスリリース，2002年4月11日．http://members.fortunecity.com/toleransi/bloody_voc5.html;
32. 実際この国際セミナーは，インドネシアの高級日刊紙コンパス *Kompas* によって全国報道された．*Kompas*, 2002年9月5日．
33. *NRC Handelsblad*, 2002年3月19日．ザンドフリートの手がけた企画展は対象とする時代を1950年まで（実際の展示は1949年インドネシアの主権獲得まで）としており，VOCとその後の植民地支配を連続的に捉えようとしたことが注目に値する．しかし植民地・独立戦争期の展示はあまりに量が少なく，観衆にVOCとの連続性を実感させるには物足りない印象を与えた．
34. *De Volkskrant*, 2002年3月21日．
35. 「誰もが参加する」方式との説明は，同誌に拠る．「ポルダーモデル」とは，労働者，雇用者，政府の三者が，ともに社会経済的問題において責任ある取り組みをすることを謳ったモデル．具体的には，労働者が賃金の抑制を受け入れる代わりに雇用者は長期雇用を提供するものとし，政府はこうした問題において労働者・雇用者団体に責任を委ね，労働条件に関する規制を緩和することが求められる．1982年のワッセナールの合意によって公式に開始され，以後オランダの経済発展と社会の安定に重要な貢献を果たしたとされる．
36. *NRC Handelsblad*, 2002年3月21日．
37. *Kompas*, 2002年3月25日．
38. *Kompas*, 2002年3月28日．
39. KNPMBIの声明文が，彼らの抗議行動が民間テレビ局，メトロTVと日刊紙コンパスによって報道されたことを伝えている．2002年3月20日．http://members.fortunecity.com/toleransi/bloody_voc.html